

厚生労働省独立行政法人評価委員会高度専門医療研究部会（第29回）  
議 事 次 第

平成26年8月4日（月）  
15:00～18:35  
厚生労働省  
専用第23会議室（6階）

1 開会

2 議事

【国立がん研究センター】

（1）平成25年度業務実績評価（個別評価）について

【国立成育医療研究センター】

（2）平成25年度業務実績評価（個別評価）について

3 閉会

<配付資料>

【国立がん研究センター】

資料1-1 平成25年度の主な取り組み  
資料1-2 平成25年度 事業概要  
資料1-3 平成25年度 業務実績評価シート  
資料1-4 平成25年度 業務実績評価評定記入用紙

【国立成育医療研究センター】

資料2-1 平成25年度 業務実績の概要  
資料2-2 平成25年度 業務実績評価シート  
資料2-3 平成25年度 業務実績評価評定記入用紙

参考資料

- 1 議事について
- 2 自己評定一覧表

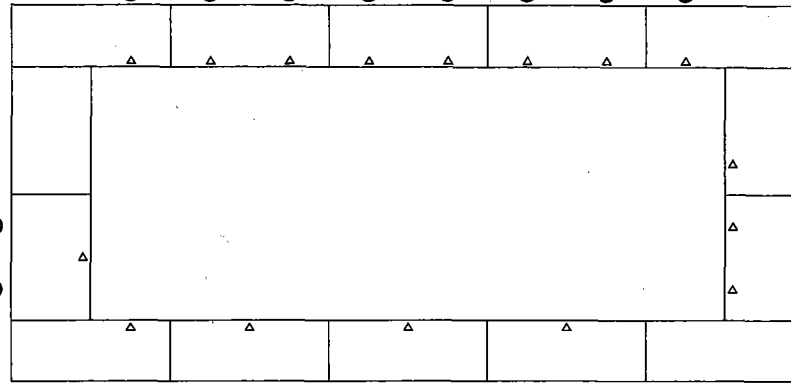
以上

# 独立行政法人評価委員会 高度専門医療研究部会(第29回)

## (国立がん研究センター)

平成26年8月4日(月)  
15:00~18:35  
厚生労働省  
専用第23会議室(6階)

齋 藤 委 員 ○	祖 父 江 委 員 ○	花 井 委 員 ○	内 山 部 会 長 代 理 ○	福 井 委 員 ○	藤 川 委 員 ○	三 好 委 員 ○	本 田 委 員 ○
-----------------------	----------------------------	-----------------------	--------------------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------



○ 藤長島  
○ 佐医政局医療経営支援課長  
○ 医政局医療経営支援課長補佐

○ 藤  
○ 安  
情報政策・政策評価審議官  
○ 藤澤 政策評価官  
○ 和田政策評価官室長補佐

○ 藤原 企画戦略局長	○ 国立がん研究センター 若尾 がん対策情報センター長	○ 国立がん研究センター 荒井 中央病院院長	○ 国立がん研究センター 堀田 理事	○ 国立がん研究センター 中国 釜 研究所長	○ 国立がん研究センター 塚本 理事長特任補佐	○ 国立がん研究センター 小須 田 統括事務部長
-------------	-----------------------------	------------------------	--------------------	------------------------	-------------------------	--------------------------

速  
記

入  
口



# 平成25年度の主な取り組み

— 国立がん研究センター新ビジョンの策定 —

## 革新への挑戦と変革 Novel, Challenge and Change

研究所

早期・探索臨床  
研究センター

中央病院

東病院

がん予防・検診  
研究センター

がん対策情報  
センター

# がんにならない、がんを負けない がんと生きる社会をめざして

〔 2014年8月4日 厚生労働省独立行政法人評価委員会  
高度専門医療研究部会説明資料 〕

独立行政法人国立がん研究センター  
National Cancer Center

# がん研究対策と 国立がん研究センターの歩み

がん研究10か年戦略(2014-2023)

第2次がん対策推進基本計画(2012)

がん登録推進法(2013)

日本再興戦略(2013)

健康・医療戦略(2014)

独立行政法人日本医療研究  
開発機構法(2014)

第3次対がん10か年総合戦略  
(2004-2013)

がん対策基本法(2006)

がん対策推進基本計画(2007)

がん克服新10か年戦略  
(1994-2003)

対がん10か年総合戦略  
(1984-1993)

がんが死因の第1位(1981)

1990

東病院開院(1992)  
研究所支所(1994)

1980

国立がんセンター創立(1962)  
病院・研究所

1960

2000

がん予防・検診研究センター(2004)  
東病院臨床開発センター(2005)  
がん対策情報センター(2006)

2010

独立行政法人化(2010)

早期・探索臨床研究センター(2011)

EPoC  
Epidemiology, Prevention & Control

研究支援センター(2014)  
人材育成センター(2014)

2015

研究開発型独立行政法人(2015)

National Cancer Center

1



## 国立がん研究センターの役割

- 国立高度医療研究センター
- 研究開発型独立行政法人

NCCは、独立行政法人の中でも国内に37機関しかない研究開発型の法人で、がん領域においては唯一

昨年12月24日に閣議決定された「独立行政法人改革に関する基本方針」において、「研究開発成果の最大化」を目的とし、大学又は民間企業が取り組みがたい課題に取り組む法人として位置づけられた

- がん専門の研究・早期探索・診療機関

研究と診療を一体的に進める国内最大のがん専門機関・  
早期・探索的臨床試験拠点

2

National Cancer Center

# 国立がん研究センターの役割

## 国のがん対策

### 「がん対策推進基本計画」

[http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/gan\\_keikaku.html](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/gan_keikaku.html)  
 がん対策基本法に基づき策定されたがん対策の基本方針  
 平成24(2012)年度から平成28(2016)年度までの5年間の対象  
 「がん患者を含む国民が、がんを知り、がんと向き合い、  
 がんに負けることのない社会」

### 「がん研究10か年戦略」

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000042871.html>  
 2014年4月 文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣  
 「根治・予防・共生 ～患者・社会と協働するがん研究～」  
 2013年8月 今後のがん研究のあり方に関する有識者会議  
 座長：堀田知光 独立行政法人国立がん研究センター 理事長

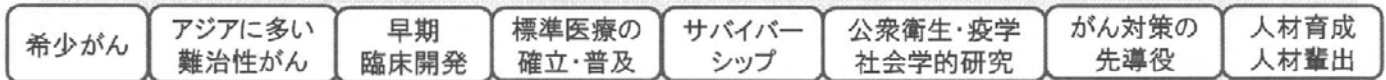
## 日本が抱える課題

- 高齢化
- ドラッグラグ
- 希少がん対策
- サバイバーシップ
- がん患者の社会的問題
- がん対策の推進と評価
- 専門医療従事者不足

## 国立がん研究センターの役割

2013年12月24日閣議決定「独立行政法人改革に関する基本方針」

- 大学又は民間企業が取り組みがたい課題への取り組み
- 世界レベルでの研究開発成果の最大化



National Cancer Center

# 国立がん研究センターのあり方の検討



# 新生国立がん研究センターの 理念と使命

- 理念

患者・社会と協働し世界最高の研究を行う

- 使命

1. がんの本態解明と予防
2. 高度先駆的医療の開発
3. 標準医療の確立と普及
4. サバイバーシップの充実
5. 情報の収集と提供
6. 人材の育成
7. 政策の提言
8. 国際貢献

がんにならない、がんを負けない  
がんと生きる社会

5

## 実現するための組織機能

診療研究 } を束ねる がん対策実行の先導役

基礎研究

橋渡し研究

診療  
臨床研究

ヘルス  
リサーチ

がん対策  
事業

コアファシリティ  
事業

基礎研究支援

研究支援機能

臨床研究支援

人材育成機能

～ 基本精神 ～

革新への挑戦と変革 *Novel, Challenge and Change*

6

## 基礎研究

- がんの本態解明とそれに基づくバイオマーカー探索
- ファースト・イン・ヒューマンを含む早期臨床開発の推進
- 希少がん、アジアに多い難治性がんの発展・進展・治療抵抗性等の機序の解明に関する研究
- 成果を基礎から臨床につなげる一連の研究活動を推進する基盤整備としてプラットフォーム事業(次世代シークエンス技術を用いた遺伝子解析のデータベース化)

## 橋渡し研究

- 研究的要素を伴う最先端医療の推進
- 標準医療の確立と普及
- 希少がんセンターの設置
- 緩和医療を含むサポーターケアセンターの充実
- 内視鏡センター、通院治療センター、臨床試験病棟のさらなる強化

## ヘルスリサーチ

ヘルスリサーチセンターの設置

がんを有する患者のみならず、国民全体に研究成果を還元

- 疫学、予防、検診開発、サバイバーシップ、社会学、医療経済、生命倫理、情報提供に関する研究、政策分野に関する研究体制の一本化

## がん対策事業

がん対策基本計画実行の先導役

- がん登録データ収集・解析の事業化およびがん登録データを用いた研究基盤の構築
- がん情報の収集と発信
- 診療連携拠点病院のネットワーク強化

## 研究支援機能

研究支援センターの設置

- 基礎研究、臨床試験、疫学研究、社会学研究、看護研究等全ての研究を一元的に支援

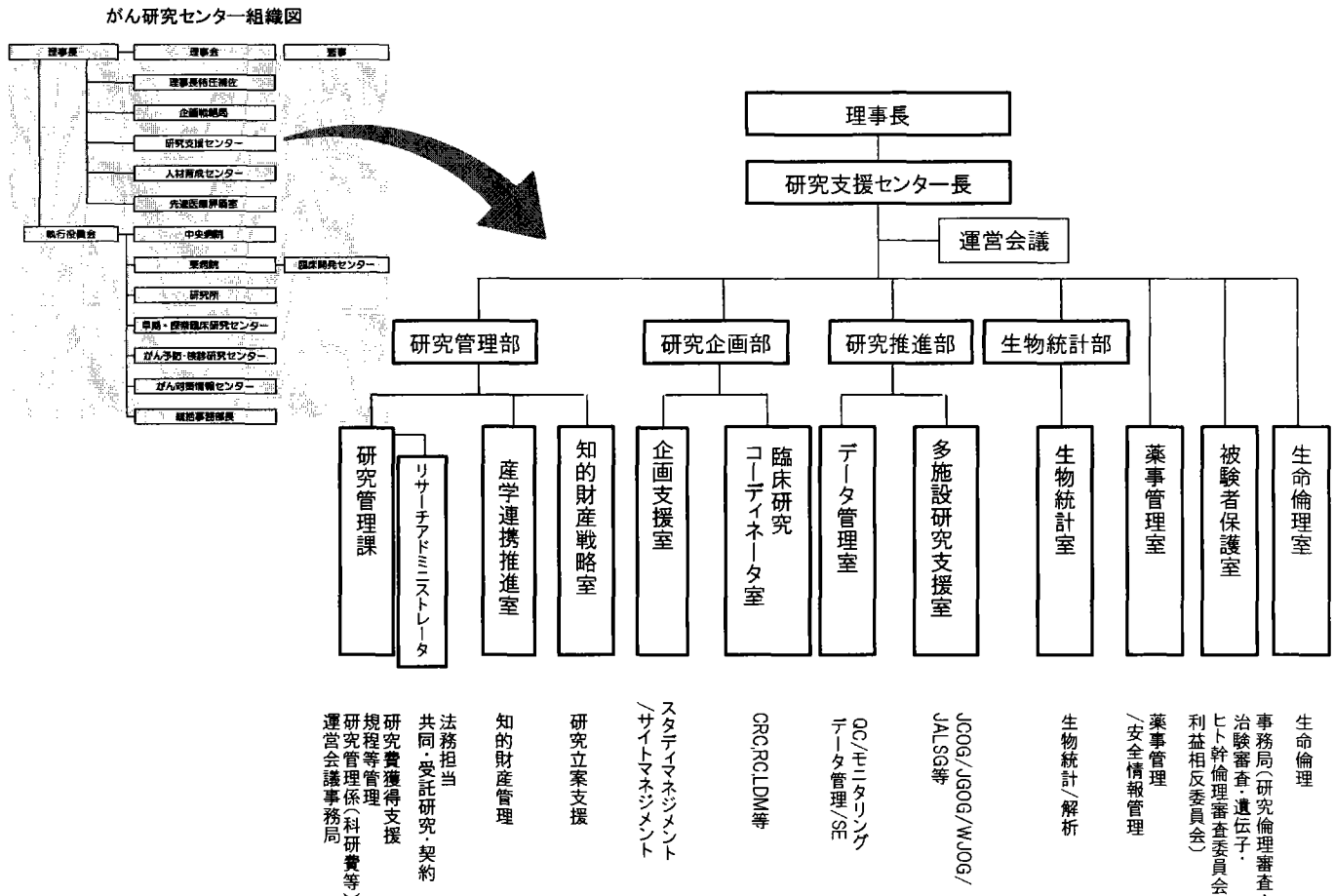
生物統計コンサル、データマネジメント、研究参加者ケア(IC支援等)、戦略的研究費獲得、知的財産、産学連携、研究倫理関連事務 等

## 人材育成機能

人材育成センターの設置

- キャリアパスの構築と適正な評価
- 教育プログラムの管理・開発
- 教育施策全体の企画・マネジメント
- わが国のがん医療の均てん化に資する戦略的人材確保と輩出

# 研究支援センター組織図



# 実現するための人事システム

## 改編目的

- 安心して業務に励める就労基盤の整備
- 管理職に適した人材基準を明確化し、それらの人材を峻別し管理職として養成することで、長期的な管理体制の強化を実現する
- 人材の峻別の結果を踏まえ、外部の医療機関・教育/研究機関への戦略的な人材輩出を行い、がん医療の質の向上と均てん化に資する

9

# 実現するための人事システム

## 医師・研究者のキャリアパスの明確化

- 雇用の見直し  
独法移行後、新規採用もしくは昇任者の雇用期間は1年、その他は無期  
→ より公平で安定した雇用の確保を目的とした新たな任期制度の導入
- 役職(科長・分野長・部長)任期制の導入  
→ 1期3年、再任あり

<必要な能力>

- 医長・主任研究員: その診療・研究領域における高い専門能力(役職ではない)  
科長・分野長・部長: 上記能力に加え、優れたマネジメント能力(部下の指導や管理、部署における業務改善等)

## 医師・研究者以外の医療スタッフおよび事務職員のキャリアパスの明確化

- 常勤職員の有期雇用(1年)の見直し  
医療職(二)は3年を目途に無期への切り替え可

10



# 実現するための充実した診療・研究環境の整備

## 築地キャンパス新診療棟の整備

世界初の病院設置型BNCT(ホウ素中性子捕捉療法)の設置を予定している新診療棟が平成26年3月に完成。



新診療棟

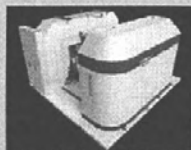
- 工期:平成23年11月～平成26年3月
- 構造規模:地下2階 地上9階
  - ・放射線治療科・診断科
  - 〔サイバーナイフ  
リニアック  
サイクロترون  
BNCT(導入予定)〕
  - ・検診センター
  - ・内視鏡センター
  - ・がん対策情報センター



リニアック



サイバーナイフ



サイクロترون



検診センター



内視鏡センター



がん対策情報センター

## 東病院外来棟増築整備

患者数増加による外来スペース狭隘問題解消及び外来エリア機能拡充のための増築を行った。(平成26年6月30日完成)

- 工期:平成25年7月～平成26年6月
- 構造規模:地上2階
  - (1F)診察室、処置室、売店、ラウンジ、理髪店
  - (2F)診察室、患者家族相談室、サポートケアセンター、臨床試験支援室



## 電子カルテの更新

中央病院、東病院で新電子カルテ(MISSION)を平成25年度に導入。



## 総合棟の新築整備

研究所の老朽化に伴い総合棟の新築整備を計画(平成29年3月完成予定)。旧予検センター棟を解体し、跡地に建設する予定。



旧検診センターを解体  
(平成26年6月～)



完成イメージ案

# 平成25年度以降の整備実績・計画

項目	独法化以前	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	26年度以降
築地キャンパス 総合棟整備 (主に研究所)	● 建設構想				■ 予検センター敷地への建設地変更	● 予検センター解体	■ 建設開始予定 H29年3月完成予定
築地キャンパス 新診療棟整備	● 建設構想	■ BNCT導入へ計画変更	■ 建設開始		■ H26年3月完成		
東病院外来増築				● 建設構想	■ 建設開始	● H26年6月完成	
電子カルテ更新 (中央病院/東病院)		● 更新構想		■ システム開発開始	● 導入		



独立行政法人国立がん研究センター  
*National Cancer Center*

# 革新への挑戦と変革

*Novel, Challenge and Change*

# 平成25年度 事業概要

(平成25年4月1日～平成26年3月31日)



独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター  
**がん情報サービス ganjoho.jp**

一般の方へ 医療関係

各種がんの解説	予防と後診	診断・治療方法
---------	-------	---------

「がん情報サービス」では、  
がん対策情報センターより  
科学的根拠に基づく信頼性の高い  
最新のがん関連情報を  
速やかに提供していきます。



# 目 次

評価 番号	内容・評価項目		自己評定	頁
-	国立がん研究センターの概要			3
-	国立がん研究センター事業体系図			4
-	国立がん研究センターの業務実績に関する報道			5
-	国立がん研究センターの施設整備等			6
1	研究・開発に関する事項	臨床を志向した研究・開発の推進	S	7
2		病院における研究・開発の推進	S	12
3		担当領域の特性を踏まえた戦略的かつ重点的な研究・開発の推進	S	14
4	医療の提供に関する事項	高度先駆的な医療、標準化に資する医療の提供	S	21
5		患者の視点に立った良質かつ安心な医療の提供	S	22
6		その他医療政策の一環として、センターで実施すべき医療の提供	S	24
7	人材育成・均てん化・情報発信などに関する事項	人材育成に関する事項	S	26
8		医療の均てん化と情報の収集・発信に関する事項	S	27
9		国への政策提言に関する事項等	S	31
10	効率的な業務運営に関する事項	効率的な業務運営体制	A	33
11		効率化による収支改善・電子化の推進	A	34
12		法令遵守等内部統制の適切な構築	A	36
13		予算、収支計画及び資金計画 等	A	37
14		その他主務省令で定める業務運営に関する事項	S	38
-	平成25年度の財務状況			40



## 1. 設立

- 平成22年4月1日
- 高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律（平成20年法律第93号）を根拠法として設立された独立行政法人

## 2. 業務

- がんその他の悪性新生物に係る医療の調査、研究及び技術の開発
- 上記の業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修、医療政策の提言
- 上記に附帯する業務の実施

## 3. 理念

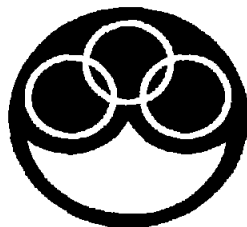
患者・社会と協働し世界最高の医療と研究を行う

**Novel, Challenge and Change**

革新への挑戦と変革

**All Activities for Cancer Patients**

職員の全ての活動はがん患者のために！



シンボルマークの3つの輪は、  
 (1) 診療 (2) 研究 (3) 教育  
 をあらわしています。  
 外側の大きな輪は「患者・社会との協働」  
 を意味します。

## 4. 使命

- がんの本態解明と予防
- 高度先駆的医療の開発
- 標準医療の確立と普及
- サバイバーシップの充実
- 情報の収集と提供
- 人材の育成
- 政策の提言
- 国際貢献

## 5. 組織

- 研究所
- 中央病院
- 東病院
- 早期・探索臨床研究センター
- がん予防・検診研究センター
- がん対策情報センター

## 6. その他

- 病床数 1,025床（中央病院600床・東病院425床）
- 入院患者数（1日平均）  
877.8人（中央病院503.3人・東病院374.5人）
- 外来患者数（1日平均）  
2,091.8人（中央病院1,144.0人・東病院947.8人）
- 役員数（平成26年4月現在） 8人（常勤3人・非常勤5人）
- 職員数（平成26年1月現在）  
2,694人（常勤1,672人・非常勤1,022人）  
※医師540人・看護師917人・研究員250人・その他987人

研究・開発に関する事項

- 臨床を志向した研究・開発の推進
- 病院における研究・開発の推進
- 担当領域の特性を踏まえた戦略的かつ重点的な研究・開発の推進

医療の提供に関する事項

- 高度先駆的な医療、標準化に資する医療の提供
- 患者の視点に立った良質かつ安全な医療の提供
- その他医療政策の一環として、センターで実施すべき医療の提供

人材育成・均てん化・情報発信などに関する事項

- 人材育成
- 医療の均てん化と情報の収集・発信
- 国への政策提言
- その他我が国の医療政策の推進等

高度先駆的医療の開発・普及  
による公衆衛生の向上・増進

効率的な業務運営に関する事項

- 効率的な業務運営体制
- 効率化による収支改善・電子化の推進
- 法令遵守等内部統制の適切な構築
- 予算、収支計画及び資金計画、短期借入金の限度額、重要な財産を処分し又は担保に供しようとする時はその計画、剰余金の使途
- その他主務省令で定まる業務運営に関する事項

効率的な業務運営の実施による  
安定的な経営基盤の確立

(1)平成25年8月6日(火) 日刊 薬業 第13769号

# 日刊薬業

早期探索臨床研究センターを設置し世界トップレベルの開発拠点を目指す

【田代 隆見】国立がん研究センターは、胆道がんの早期発見と治療の進展を図るため、胆道がん治療の国際的な連携を強化し、早期探索臨床研究センターを設置し、世界トップレベルの開発拠点を目指す。胆道がんは、膵臓がん、胆管がん、胆嚢がんを総称する。胆道がんは、膵臓がん、胆管がん、胆嚢がんを総称する。胆道がんは、膵臓がん、胆管がん、胆嚢がんを総称する。

胆道がん治療 標的遺伝子発見  
【田代 隆見】国立がん研究センターは、胆道がんの早期発見と治療の進展を図るため、胆道がん治療の国際的な連携を強化し、早期探索臨床研究センターを設置し、世界トップレベルの開発拠点を目指す。

## 発がん原因 遺伝子異常22種

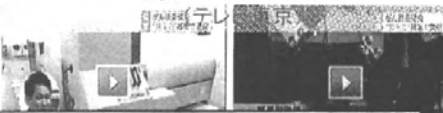
国立がん研究センターが、胆道がんの発がん原因となる遺伝子異常22種を特定した。胆道がんは、膵臓がん、胆管がん、胆嚢がんを総称する。胆道がんは、膵臓がん、胆管がん、胆嚢がんを総称する。

## がん予防の臨床報告相次ぐ

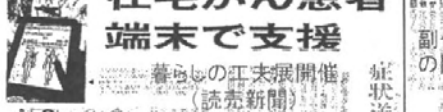
アスピリンによる大腸ポリープの抑制効果を発見 (産経新聞)  
【産経新聞】国立がん研究センターは、アスピリンによる大腸ポリープの抑制効果を発見した。アスピリンによる大腸ポリープの抑制効果を発見した。



日本初の分子イメージング技術を導入した創薬研究システムの実用化



在宅がん患者 端末で支援



がん患者 暮らしの工夫展

国立がん研究センターは、がん患者の暮らしの工夫展を開催した。がん患者の暮らしの工夫展を開催した。がん患者の暮らしの工夫展を開催した。

国立がん研究センター がん患者の暮らしの工夫展

## 実態把握 治療に道

【産経新聞】国立がん研究センターは、がんの実態把握と治療の道を開拓する。がんの実態把握と治療の道を開拓する。

副作用が少ない抗がん剤の開発 (日経産業新聞)  
【日経産業新聞】国立がん研究センターは、副作用が少ない抗がん剤を開発した。副作用が少ない抗がん剤を開発した。

希少肺がんの遺伝子診断ネットワーク (LCスクラムジャパン)による治験開始 (読売新聞)  
【読売新聞】国立がん研究センターは、希少肺がんの遺伝子診断ネットワークによる治験を開始した。希少肺がんの遺伝子診断ネットワークによる治験を開始した。

正常な細胞傷つけず  
【産経新聞】国立がん研究センターは、正常な細胞を傷つけずにがん細胞を治療する方法を開発した。正常な細胞を傷つけずにがん細胞を治療する方法を開発した。



胆道がん 新たな原因遺伝子発見



胆道がん 新たな原因遺伝子発見



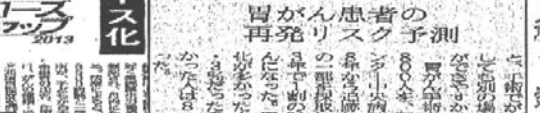
胆道がん 新たな原因遺伝子発見



胆道がん 新たな原因遺伝子発見



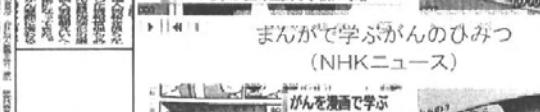
胆道がん 新たな原因遺伝子発見



胆道がん 新たな原因遺伝子発見



胆道がん 新たな原因遺伝子発見



胆道がん 新たな原因遺伝子発見

胃がん進行の確に診断  
【産経新聞】国立がん研究センターは、胃がんの進行を正確に診断する方法を開発した。胃がんの進行を正確に診断する方法を開発した。

肝臓がん 血液で早期発見  
【産経新聞】国立がん研究センターは、肝臓がんを血液で早期発見する方法を開発した。肝臓がんを血液で早期発見する方法を開発した。

がん登録 全国データベース化  
【産経新聞】国立がん研究センターは、がん登録を全国データベース化する計画を発表した。がん登録を全国データベース化する計画を発表した。

大腸検査  
【産経新聞】国立がん研究センターは、大腸検査の精度を向上させる方法を研究している。大腸検査の精度を向上させる方法を研究している。

がん患者のためのレシピ本  
【読売新聞】国立がん研究センターは、がん患者のためのレシピ本を出版した。がん患者のためのレシピ本を出版した。

おいしく「病院食」  
【産経新聞】国立がん研究センターは、おいしく「病院食」を提供する方法を開発した。おいしく「病院食」を提供する方法を開発した。

がんを学ぶ漫画 全国の学校に寄贈  
【NHKニュース】国立がん研究センターは、がんを学ぶ漫画を全国の学校に寄贈した。がんを学ぶ漫画を全国の学校に寄贈した。

がんを学ぶ漫画 全国の学校に寄贈  
【NHKニュース】国立がん研究センターは、がんを学ぶ漫画を全国の学校に寄贈した。がんを学ぶ漫画を全国の学校に寄贈した。

がんを学ぶ漫画 全国の学校に寄贈  
【NHKニュース】国立がん研究センターは、がんを学ぶ漫画を全国の学校に寄贈した。がんを学ぶ漫画を全国の学校に寄贈した。

国立がん研究センターの理念「患者・社会と協働し世界最高の医療と研究を行う」を実現するため、充実した診療・研究環境を計画的に整備

### 築地キャンパス新診療棟の整備

世界初の病院設置型BNCT(ホウ素中性子捕捉療法)の設置を予定している新診療棟が平成26年3月に完成。



新診療棟

○工期:平成23年11月～平成26年3月

○構造規模:地下2階 地上9階

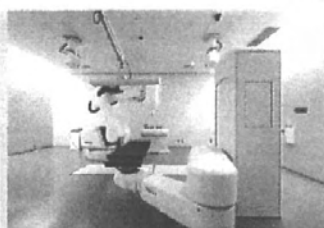
・放射線治療科・診断科

サイバーナイフ  
リニアック  
サイクロトロン  
BNCT(導入予定)

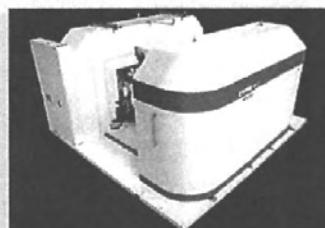
・検診センター  
・内視鏡センター  
・がん対策情報センター



リニアック



サイバーナイフ



サイクロトロン



検診センター



内視鏡センター



がん対策情報センター

### 東病院外来棟増築整備

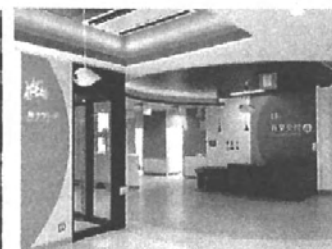
患者数増加による外来スペース狭隘問題解消及び外来エリア機能拡充の為に増築を行った。(平成26年6月30日完成)

○工期:平成25年7月～平成26年6月

○構造規模:地上2階

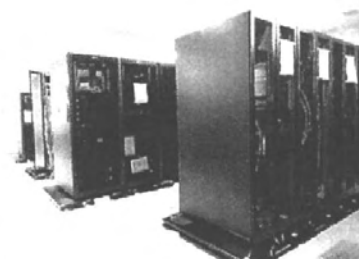
(1F)診察室、処置室、売店、ラウンジ、理髪店

(2F)診察室、患者家族相談室、サポートケアセンター、臨床試験支援室



### 電子カルテの更新

中央病院、東病院で新電子カルテ(MISSION)を平成25年度に導入。



### 総合棟の新築整備

研究所の老朽化に伴い総合棟の新築整備を計画(平成29年3月完成予定)。旧予検センター棟を解体し、跡地に建設する。



旧予検センターを解体  
(平成26年6月～)



完成イメージ案



( )内は業務実績評価シートに対応した頁数

研究所と病院等、センター内の連携強化【S】(1頁)

トランスレーショナルリサーチを推進するための相互の機能強化と連携

【ミッション】

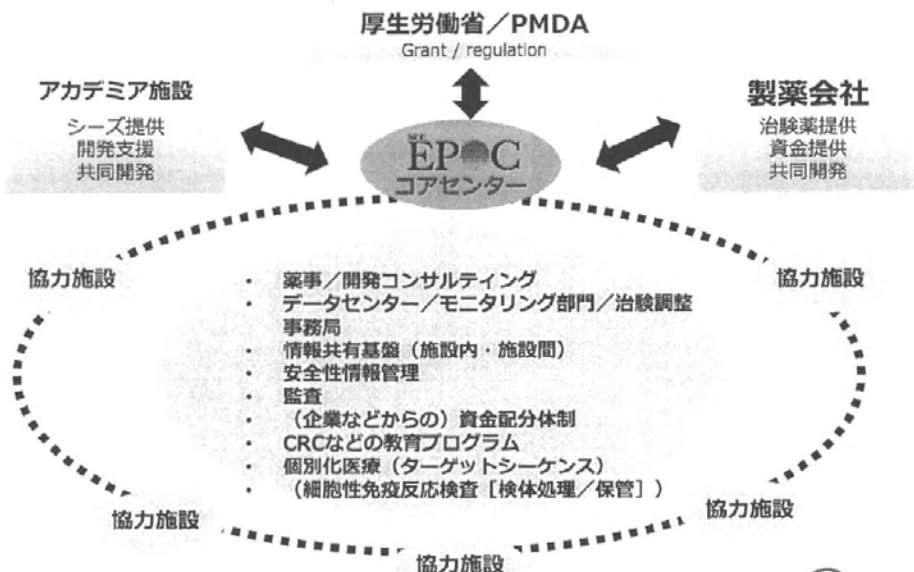
トランスレーショナルリサーチの推進のために研究所、がん予防・検診研究センター、がん対策情報センター、病院が相互の機能の強化と連携を図り、世界的レベルでの革新的医療・予防法の開発や標準医療の確立に資する成果の継続的な作出を目指す。

【業務の実績】

○世界トップの開発拠点をめざす「早期・探索臨床研究センター（EPOC）」の設置

国の「早期・探索的臨床試験拠点」に選ばれたことを受けて、病院、研究所の早期開発部門を集約し「早期・探索臨床研究センター（EPOC）」を4月に設置した。これにより、画期的新薬を開発する臨床試験拠点として、実用化に向けた臨床研究・治験実施の仕組みを構築し、日本から新しいがん医療の開発を進めていく。

【早期開発型AR0体制図】



○がん個別化治療feasibility studyの施行

病院・早期・探索臨床研究センター・研究所の連携により、個別同意に基づくバイオバンク試料等を用いた遺伝子変異検査（clinical sequencing）を行い、分子標的薬を用いたがん個別化治療を行うためのfeasibility studyを開始した。

二つのfeasibility研究

ABC 研究：クリニカルシーケンスの基盤構築

→ 20がん種 200例の遺伝子変異解析終了、重篤な有害事象の発生なし

TOPICS-1研究：第1相試験エントリーにおけるがんパネルの有用性

→7がん種 60例の遺伝子変異・増幅・融合解析終了

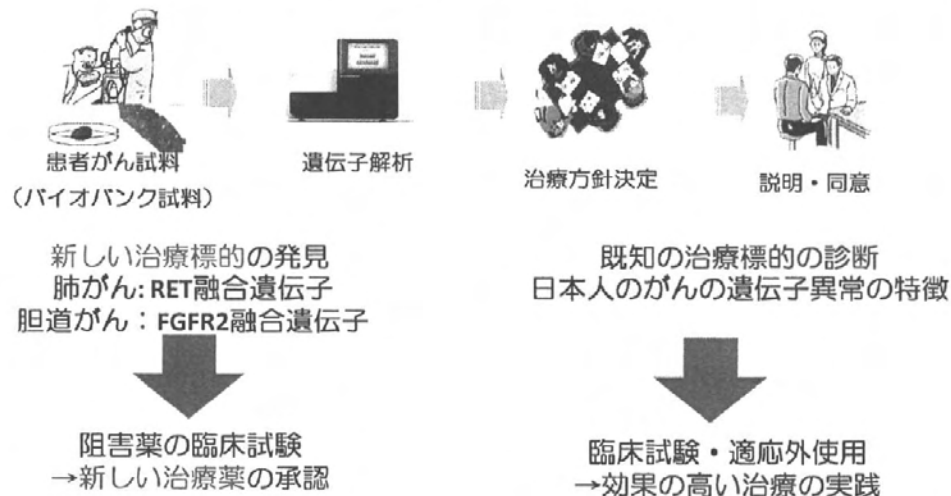
4例が遺伝子異常とマッチした第1相試験に参加

○胆道がん治療標的遺伝子の発見及び臨床試験に向けた基盤構築

胆道がんに分類される肝内胆管がんの治療標的となる新しい遺伝子「FGFR2融合遺伝子」を発見し、細胞株を用いた実験でその遺伝子の働きを阻害する薬剤も特定することに成功した。なお、本研究成果は米科学雑誌「Hepatology」に掲載された。

今後、胆道がんにおいては初めてとなる特定のゲノム異常を狙った分子標的薬の開発に向け、研究所・中央病院・EPOCが連携し、全国的な多施設共同研究による融合遺伝子陽性症例スクリーニングのための基盤構築を進めた。

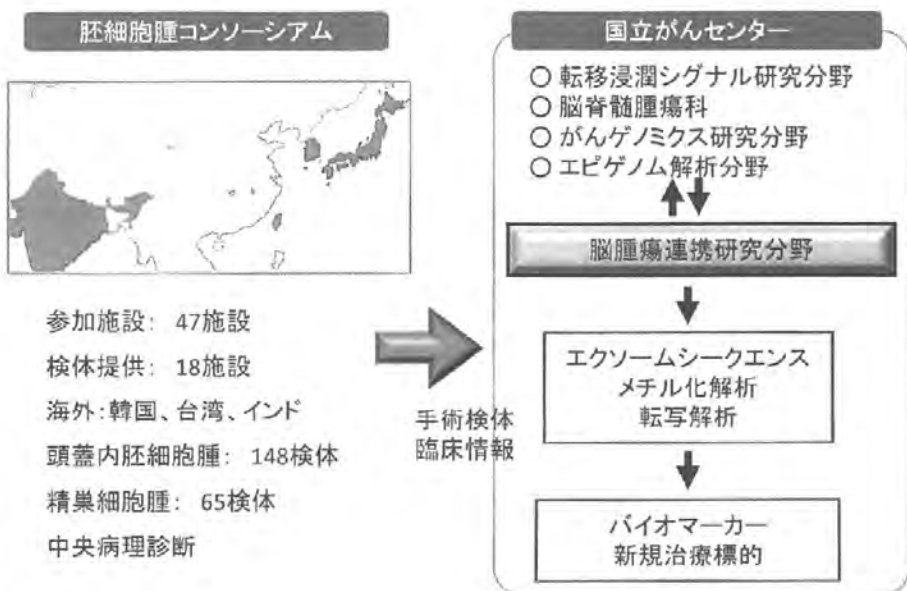
胆道がんは有効な治療法が少なく、患者の予後が極めて不良な厳しい疾患であり、内科治療に使える抗がん剤も他のがんと比較して極端に少ない。今回の研究成果は、胆道がんの効果的な標準治療確立に繋がるのが期待される。



○頭蓋内胚細胞腫ゲノム解析コンソーシアムの設立とゲノム解析実施のための体制の確立

「頭蓋内胚細胞腫ゲノム解析コンソーシアム」を設立し、全国規模の多施設共同研究体制を通じて頭蓋内胚細胞腫の検体を脳腫瘍連携研究室に集中し、ゲノム解析を行う体制を確立した。

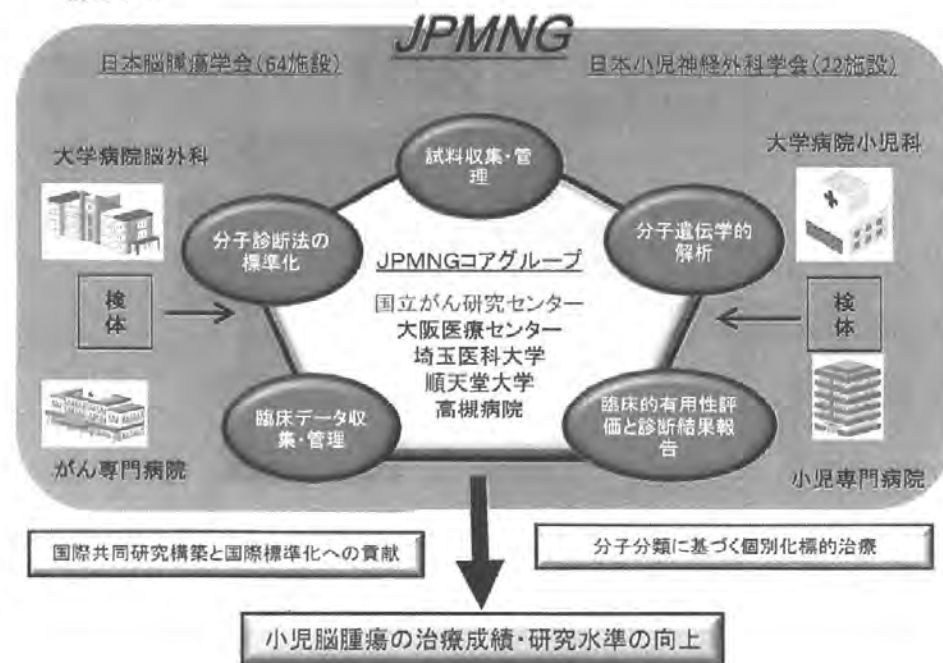
- 頭蓋内胚細胞腫はアジアに多く、日本では小児脳腫瘍の中で2番目に頻度が高い。(15.4%)
- 頭蓋内胚細胞腫を日本発の脳腫瘍研究として発展させるために、遺伝子解析の全国多施設共同研究コンソーシアムを構築し、国立がん研究センターの各分野の協力のもとゲノム解析を行う。



○日本小児分子脳腫瘍グループ(JPMNG)」の設立と小児脳腫瘍の分子診断を行う体制の構築

「日本小児分子脳腫瘍グループ(JPMNG)」の設立にコアメンバーとして加わり、全国の小児脳腫瘍関連施設から検体を集め、脳腫瘍連携研究室において小児脳腫瘍の分子診断を行う体制を構築した。

- 小児脳腫瘍は固形腫瘍としては小児がんの中で最も頻度が高い難治がんである
- 日本脳腫瘍学会と小児神経外科学会の合同プロジェクトとしてJPMNGを設立し、国内の症例を集中して標準化された分子分類を行う中央分子診断体制を構築する



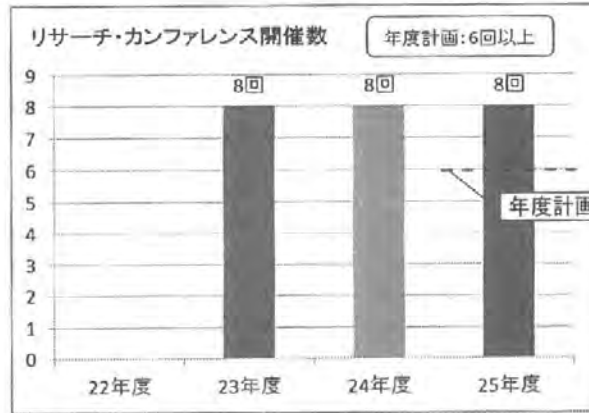
○リサーチ・カンファレンスの実施

研究所職員と病院職員が一堂に会して一つのテーマについて議論するリサーチ・カンファレンスを実施。

平成23年度：8回  
平成24年度：8回  
平成25年度：8回

(目標値)  
○年度計画：6回以上  
○中期計画：-

目標達成

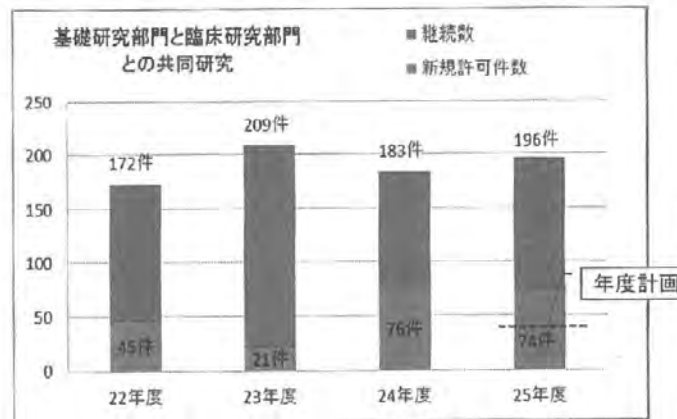


○基礎研究部門と臨床研究部門との共同研究の実施

共同研究の実施件数 (括弧は新規共同研究数)  
24年度：183件 (76件)  
25年度：196件 (74件)

(目標値)  
○年度計画：新規共同研究を45件以上  
○中期計画：-

目標達成



○その他の実績

- ▶ 早期診断・スクリーニング用バイオマーカー開発研究において、肺がん・膵がん・胃がん・大腸がん等、計約10課題に関して展開した。
- ▶ ターゲットシーケンスを用いたがん患者の遺伝子プロファイルを明らかにする遺伝子解析研究(ABC研究/TOPICS-1研究)を開始した。

研究基盤の整備(3頁)

【業務の実績】

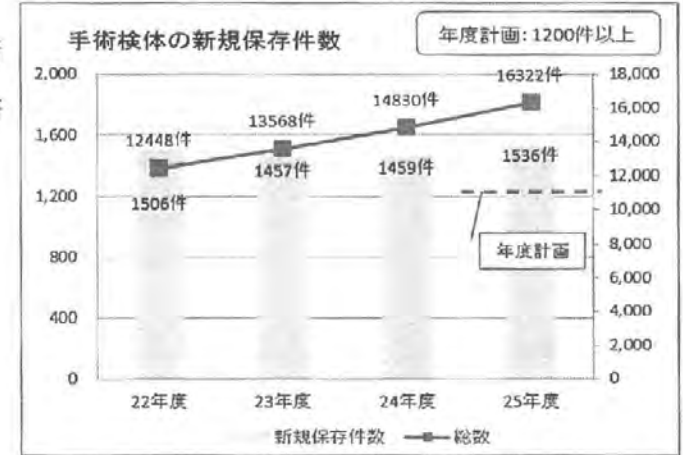
○センター内バイオバンクへの手術検体の保存

1,536症例(7,866バイアル)の病理凍結組織(手術検体)を新規にバイオバンクに受け入れ、1,039症例(1,810バイアル)を研究に払い出した。

平成24年度：1,459件  
平成25年度：1,536件

(目標値)  
○年度計画：1,200件以上  
○中期計画：-

目標達成



臨床研究の推進のための中核機能の強化【S】(4頁)

【業務の実績】

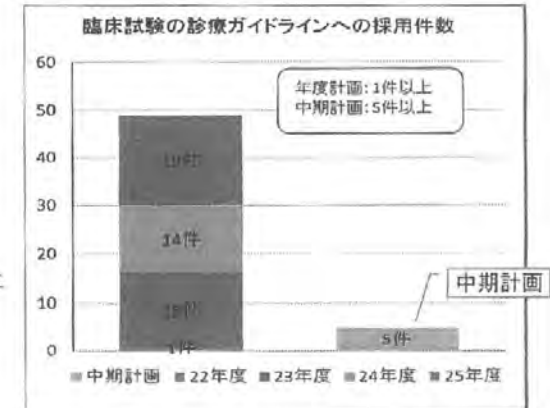
○学会等が作成する診療ガイドラインへの採用

センターが支援した臨床試験について、学会などが作成するガイドライン19件に採用された。

24年度：14件  
25年度：19件  
(22年度から25年度の累計：49件)

(目標値)  
中期計画：22年度～26年度までの累計5件以上

目標達成



○臨床研究の信頼性確保のため、直接的又は間接的に実施する臨床研究実施機関の訪問監査を推進

平成24年度：13機関

平成25年度：21機関

22年度～25年度の訪問監査機関（57機関）のうち

都道府県がん診療連携拠点病院：12機関、地域がん診療連携拠点病院：30機関

（目標値）

○年度計画：訪問機関数：21機関

○中期計画：都道府県がん診療連携拠点病院：11機関

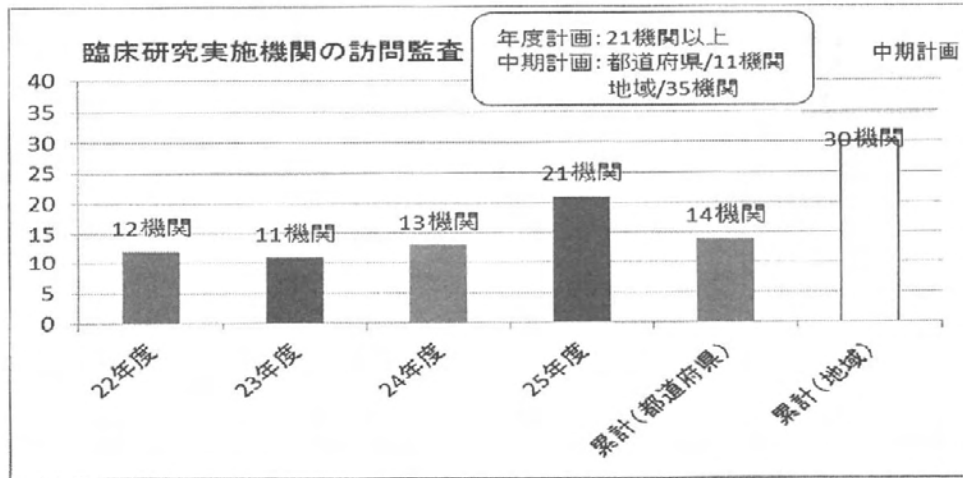
地域がん診療連携拠点病院：35機関

○年度計画：目標達成

○中期計画：

都道府県がん診療拠点病院：達成

地域がん診療拠点病院：26年度中に達成見込み



産学官等との連携強化【S】(5頁)

産学官連携による医療イノベーションの推進／企業・アカデミア間での推進

【ミッション】

産業界、先端研究施設、主要がんセンター等と「医療クラスター」を形成して先端的な臨床研究を推進するために、産官学連携を支援する産官学連携オフィス等の整備を行う。

平成21年度に比し、中期目標の期間中に、共同研究件数、治験実施件数及び国際共同治験実施数について各々5%以上の増加を目指す。

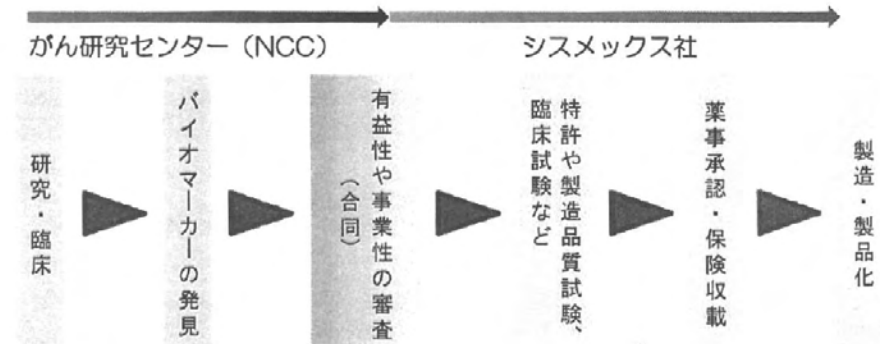
【業務の実績】

○シスメックス社と体外診断薬の開発で提携

検体検査機器大手のシスメックス社と体外診断薬の共同開発で包括提携を結んだ。NCCで発見された病気や治療を判定するための指標などを基に、シスメックス社が製品化を進めていく。

薬を投与した場合の効き目や副作用などを予測する体外診断薬は患者個々の体質や病状に合わせた「個別化医療」に不可欠とされ、日本発の製品として普及を目指す。

【体外診断薬の共同開発の流れ】



○共同研究件数

24年度：188件（対21年度比39%増）

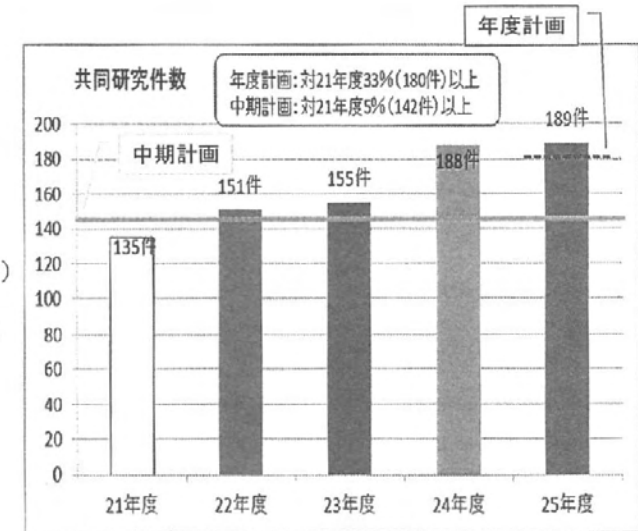
25年度：189件（対21年度比40%増）

（目標）

○年度計画：21年度に比して33%以上増（180件）

○中期計画：21年度に比して5%以上増（142件）

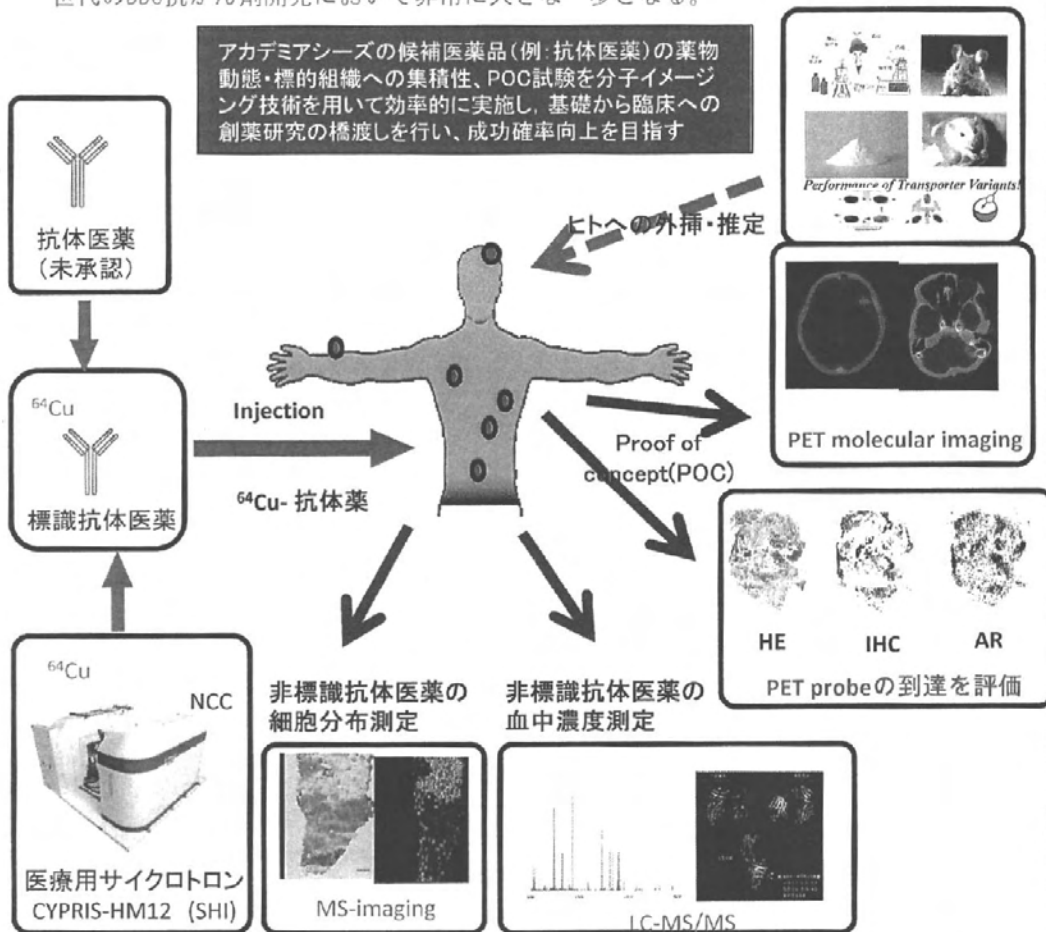
目標達成



○世界初・質量顕微鏡を用いたDDS抗がん剤の薬剤分布の高精細画像化

質量顕微鏡を用いてDDS抗がん剤（DDS：薬物送達システム）の薬剤分布を高精細画像化することに世界で初めて成功し、実際の薬剤分布を視覚的に確認することができた。これによりDDS 抗がん剤が通常の抗がん剤よりもがん細胞に多く集まり、かつ、正常細胞にほとんど移行しないことが明らかになった。（英科学誌「Nature」の姉妹紙「Scientific Reports」に掲載）

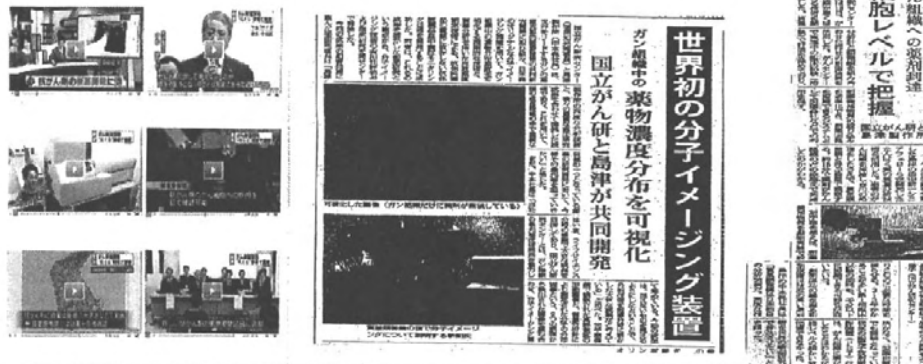
従来法は、血液中の薬剤濃度を調べ抗がん剤の腫瘍への到達度を推定していたが、この新しい方法では、腫瘍への到達度を実際に目で観察することができ、次世代のDDS抗がん剤開発において非常に大きな一歩となる。



標的部位における薬剤集積性を生体分子イメージングにて解析



日本初の分子イメージング技術を導入した創薬研究システムの実用化に関する報道



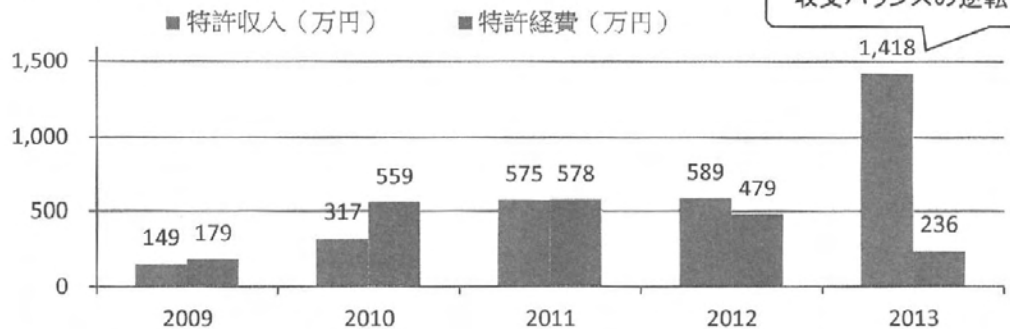
知的財産の管理強化及び活用推進【S】(8頁)

知的財産面からの共同研究や受託研究等の推進

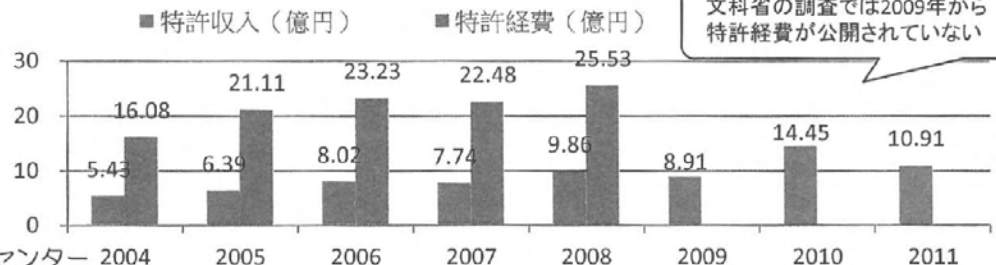
【ミッション】

研究成果を知的財産面から目利きし、出願・維持を適切に判断し、効率化する。

NCCの特許収入と特許経費



(参考) 大学(全体)の特許収入と特許経費



臨床研究機能の強化【S】(13頁)

臨床研究を行うための診療体制等の整備

【ミッション】

病院は臨床開発の様々な段階に対応するため、橋渡し研究を含む臨床研究を行うための診療体制等の整備を進める。

【業務の実績】

○先端医療科の設置

築地キャンパス、柏キャンパスに分断されていた複数の診療科の医師による診療科横断型Phase I チームが、早期・探索臨床研究センター所属の先端医療科として新たに発足、定期的なカンファレンスを実施するとともに、進行固形癌患者を対象とし難しい第I相試験を多数実施した。

先端医療科（2013年4月～）

Department of Experimental Therapeutics

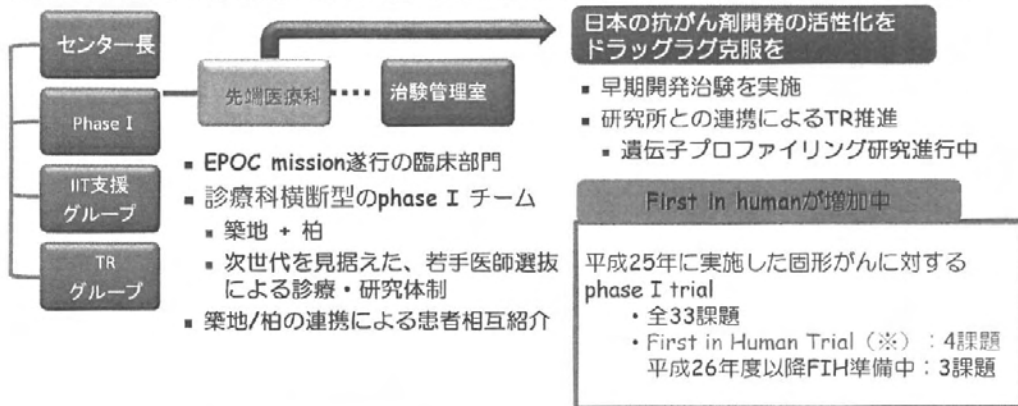


First in humanの医師主導治験・企業治験

Mission

未承認薬を用いた医師主導治験（POC試験）

トランスレーショナルリサーチ



※ First in Human Trial：世界で初めて人体に薬物を投与する試験

臨床試験の支援部門の整備・強化と治験連携の体制の充実

【ミッション】

センターで実施される臨床試験の支援部門の整備・強化を行うとともに、治験関連の体制の充実を図る。

【業務の実績】

○治験収入・治験実施件数

24年度：366件（対21年度比43%増）  
25年度：438件（対21年度比71%増）

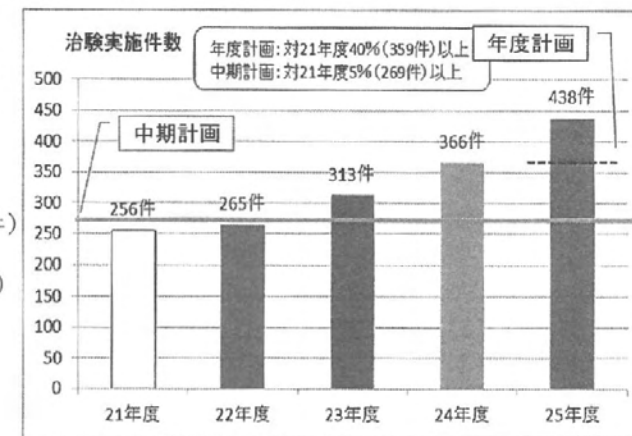
（目標）

○年度計画  
：21年度に比して40%以上増（359件）

○中期計画  
：21年度に比して5%以上増（269件）

目標達成

両病院の治験収入は約25億円であり、通常の大学病院の10倍の規模である。



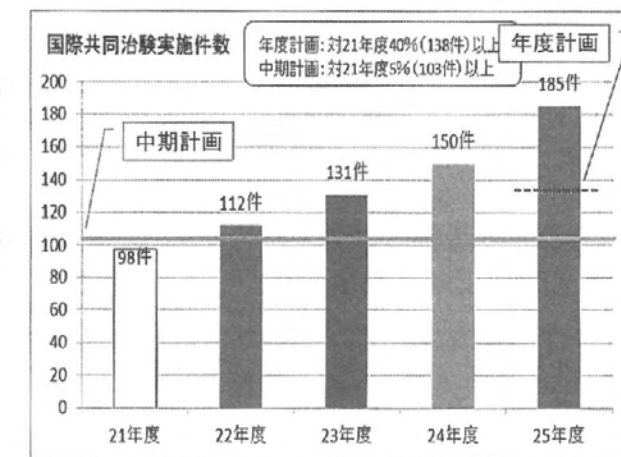
○国際共同治験実施数

24年度：150件（対21年度比53%増）  
25年度：185件（対21年度比87%増）

（目標）

○年度計画  
：21年度に比して40%以上増（138件）

○中期計画  
：21年度に比して5%以上増（103件）



## ○生物統計部門の設置

臨床研究の信頼性・科学性の向上に必須である生物統計部門を設置。生物統計家を6名配置（他NC・大学の5倍程度）し、臨床試験/臨床研究に対するコンサルテーション体制を継続的に実施している。

## ○生物統計の教育コース

臨床試験に関する基礎およびアドバンスドコースの教育プログラムを継続的に実施し、生物統計に関しても教育コースを開始した。

## 薬事・規制要件に関する専門家育成のための人事交流の実施

## 【業務の実績】

## 【ミッション】

- 積極的に独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)等との人事交流を行って確保された薬事・規制要件の専門家を含めた支援体制の基盤整備を行い円滑な治験・臨床試験実施を進める。
- 治験申請から症例登録(First patient in)までの期間を平均130日以内とする。

## ○PMDAとの人事交流

PMDA（及びその前身のPMDEC）発足以降17年にわたる人事交流を実施しており、昨年に引き続き研究員1名を派遣するとともに、平成25年7月から薬剤師を派遣した。PMDAとの定期的人事交流により、承認申請に関する専門委員、適応外、先進医療などの審査委員などでの貢献も大きく、治験、臨床研究の教育的、規制的対応にも協力している。

また、PMDAより医師を採用して審査経験を生かして臨床研究等に貢献するようにした。

PMDAへ派遣中の職員数：3名（医師1名、薬剤師1名、研究員1名）

PMDAから受け入れ中の人数：1名

PMDA経験を有する職員数：10名（医師7名、薬剤師2名、生物統計家1名）  
（平成26年3月31日時点）

## ○治験申請から症例登録までの期間

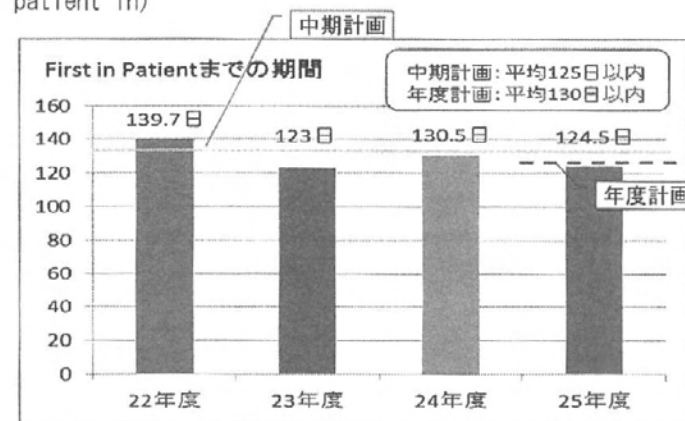
治験申請から症例登録(First patient in)までの期間

中期計画：130日以内  
年度計画：125日以内  
25年度実績：124.5日

目標達成

## (参考)

治験申請から契約までの期間  
中期計画：—  
年度計画：—  
24年度実績：39日  
25年度実績：38日



## 倫理性・透明性の確保(14頁)

## 倫理審査委員会等の機能の強化

## 【ミッション】

倫理性・透明性が確保された臨床研究等の実施を図るため、倫理審査委員会等の機能を強化するとともに、主要な倫理指針等について職員教育の充実を図る。

## 【業務の実績】

## ○臨床研究の信頼性確保を目的とした内部監査の実施

2名の監査専門職員（いずれも製薬会社OB）を配置し、年間監査計画に基づき、臨床研究の内部監査を計22部門35研究課題の監査を実施した。また、四半期毎に監査結果をまとめ、指摘の傾向分析を行い、理事長等に報告した。

## ○主要な倫理指針等についての職員教育の充実

「臨床研究に関する倫理指針」の説明や研究倫理と被験者保護等をテーマにした職員向け研究倫理セミナーを計3回開催した【総参加者数：636名】

また、研究における個人情報保護の基本概念や匿名化等の体制・仕組みをテーマにした職員向け個人情報保護セミナーを1回開催（平成26年1月10日）した【参加者数：158名】また、当該内容のDVD上映会を実施した【参加者数：62名】。全参加者数は、220名。

評価項目3：担当領域の特性を踏まえた戦略的・重点的な研究・開発の推進（1/7）

重点的な研究・開発戦略の考え方

【ミッション】

企業や国内外の大学、学会等のアカデミア機関との産官学連携の一層の推進を図りつつ、基礎研究から治療技術の開発等を推進する。

【業務の実績】

○企業との連携

外資系企業を含む大手製薬企業とは、臨床開発を進めるためのトランスレーショナルリサーチとして、病理検体を用いた共同研究が複数行なわれており、早期・探索臨床研究と連動した研究が活発化している。

- 第一三共との創薬初期からの連携は、開発候補化合物が得られつつある。
- 診断領域では、新たにシスメックス社と連携契約を締結し、癌領域の体外診断薬の共同開発の連携する協定を締結した。（10頁参照）
- 島津製作所とは、質量分析計を基盤とした医薬品開発のトランスレーショナルリサーチの分野で連携を進め、その成果として分子イメージング技術を導入した創薬研究システムの実用化を進めていく。（11頁参照）

○大学・研究機関との連携

38の共同研究について、大学・公的研究機関と新規に契約した。

（例）

- ・「がん抑制遺伝子 p53 を標的とした新規抗がん剤の創製」  
→ 東京大学、東京理科大学
- ・「白金製剤の薬理効果増強作用を目的とした医薬品の開発」  
→ 理化学研究所
- ・「血中循環がん細胞の検出及び解析法の開発」  
→ 産業技術総合研究所

がんの原因、発生・進展のメカニズムの解明【S】(20頁)

がんの原因解明に資する研究の推進

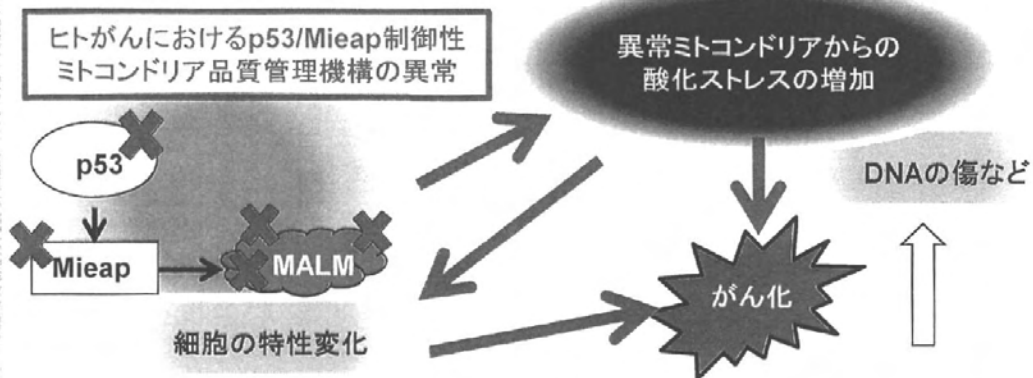
【ミッション】

がん発生の要因に関して、ゲノム・エピゲノム解析等をもとに、外的な環境要因、内的環境要因及び遺伝的な発がん要因の解明に取り組む。  
がんの発生・成立に関して主導的な役割を果たしている分子機構の解明に取り組む。  
発がん感受性の分子機構を解明し、その知見に基づく新しい予防法の開発を目指す。

【業務の実績】

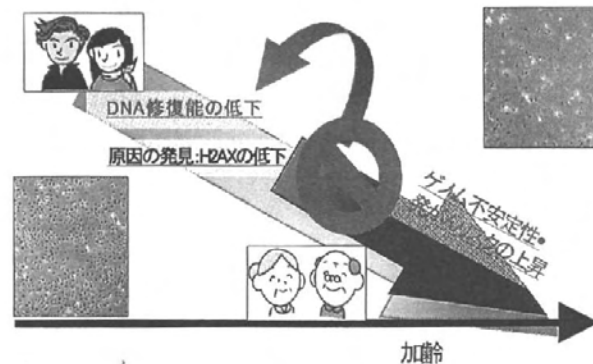
○Mieapヘテロ欠失型の大腸がんモデルマウスの作成

Mieapノックアウトマウスと大腸がんモデルマウスとの交配により、Mieapヘテロ欠失型の大腸がんモデルマウスの作成に成功した。このマウスは、Mieap正常型に比べ顕著な寿命の短縮を示した。このことから、Mieapを介したp53によるミトコンドリアの健全な品質維持は大腸腫瘍の発生・進展を抑制する新しいがん抑制機能である可能性が示された。



○細胞老化の制御にがん化の抑制制御

がん抑制遺伝子のARFによる細胞の不死化の防御効果を解析し、ARFもp53と同様、ヒストンH2AXレベルを抑制する制御に関わり、これによって細胞を静止状態に誘導し、細胞を不死化から防御していることを見出した。





がんの発生・進展のメカニズムに関する研究の進捗

【ミッション】

がんが多様性を獲得し、進展・浸潤・転移する過程、及び、治療抵抗性を獲得する分子機構を、がん細胞側と宿主側の両方の観点から統合的に解明する事を目指す。

【業務の実績】

○頭蓋内胚細胞腫瘍の遺伝子解析

次世代がん研究戦略推進プロジェクト「悪性脳腫瘍克服のための新規治療標的及びバイオマーカーの創出における頭蓋内胚細胞腫瘍の遺伝子解析」において、合計198例の頭蓋内と精巣胚細胞腫瘍に対し全エクソームシーケンズを中心とした網羅的遺伝子変異解析を行い、MAPK等シグナル伝達系の異常が高頻度に見られることを発見した。

がん本態解明の研究の推進

【ミッション】

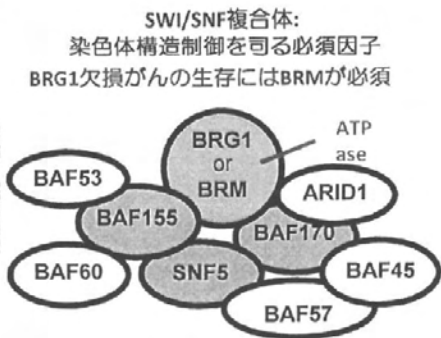
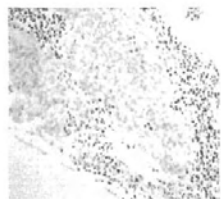
がん本態の特性を様々な検討により解明し、有効な治療標的の同定につなげる。

【業務の実績】

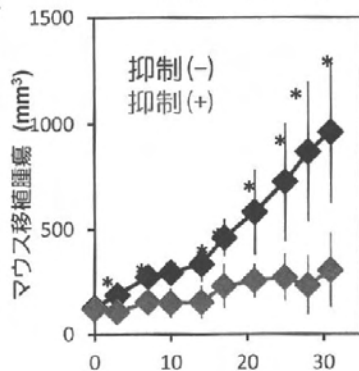
○がん遺伝子異常陰性の肺がんにおける治療標的の発見

ドライバーがん遺伝子変異陰性の肺腺がんにBRG1クロマチンタンパク質欠損が頻発することを見出し、BRM\_ATPaseが合成致死治療標的であることを見出した。

クロマチン制御因子BRG1が欠損 (陰性例の20%) → BRG1欠損がんの治療標的BRMを同定



BRM発現抑制



がんの実態把握(22頁)

がん登録の推進によるがんの実態把握

【ミッション】

がん登録を推進し、がんの罹患、転帰などの実態とその推移を把握するために、登録対象の範囲や予後調査の方法等を含めた実施体制の標準化と連携体制について検討を行う。

【業務の実績】

○院内がん登録全国収集データ

397拠点病院およびそれ以外の155都道府県推薦病院 (準拠点病院) から2011年診断例について院内がん登録全国集計データを約67万件 (うち、拠点病院約58万件) を収集。施設別情報を含めた集計報告書を作成・公表した。

また、2012年診断例については、397拠点病院から院内がん登録全国収集データを約61万件収集した。都道府県推薦病院 (拠点に準ずる病院) 300施設程度を対象に、2012年症例データを収集を行う。(29頁参照)

がんの原因究明に基づく予防法の研究開発

【ミッション】

動物実験や大規模コホート研究等の疫学研究を実施することにより、がんの発生に関わる外的要因、内的要因、及びそれらの相互作用を解明するなどに取り組み、がんのリスク・予防要因究明のための基礎的研究を推進する。

【業務の実績】

○ヒ素と喫煙の肺がんリスク上昇等の関連性について

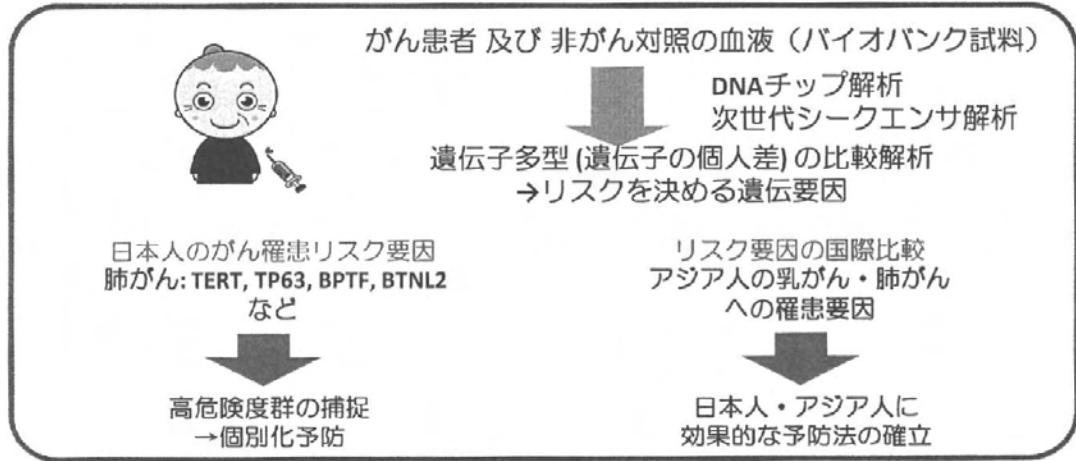
国際的に発がん物質と評価されているヒ素について、日本人が食事から摂取するレベルにおいてリスクと関連するかどうかを検討したところ、全がんにおいては関連が見られなかったものの、喫煙男性の肺がんのリスク上昇との関連を観察した。その他、肥満に関連する血中アディポネクチン濃度が高いほど肝がんのリスクが上がることを示し、アディポネクチンは肝機能が低下すると上昇するために、肝がんのリスクマーカーとなっている可能性などを示した。

○アジア人における乳がんリスクに関する遺伝子多型の同定

国際コンソーシアム研究、国際共同研究への参加を通して、6編の論文を学術誌に掲載し、特にアジア人における乳がんリスクに関連する遺伝子多型の同定に貢献した。

○アジア人肺腺がんリスクを規定する遺伝子座の探索研究

バイオバンク試料を用い、より規模を拡大して、アジア人に好発するEGFR変異がんへの罹患リスクを規定する遺伝子群に関する全ゲノム関連解析を行った。また、国際コンソーシアムILCCO, FLCCAに参画し、アジア人肺腺がんリスクを規定する遺伝子座の探索研究を行った。



本態解明に基づく高度先駆的医療、診断・治療技術、予防・検診法の開発等【S】(24頁))

有効ながん予防法の研究開発／革新的な検診手法の研究開発

【ミッション】

- 科学的根拠に基づき、発がん性やがん予防の有効性の評価を行うとともに、基礎的研究の知見に基づく新しい予防法の開発を行う。
- 検査法の検討や診断手法の検討を進める

【業務の実績】

○乳房断層撮影装置の最適化

乳房断層撮影装置（Tomosynthesis）の有用性を検討する目的で、中央病院の乳腺外科との連携で乳がん患者に検査を施行し、Tomosynthesisにおける検査の最適化を行い、乳がん検診での実施に向けての基盤整備を行った。

○肺がんCT検診における治療方針の構築

肺がんCT検診においては、肺のすりガラス陰影を8年間に亘り経過観察し、すりガラス陰影の変化をパターン分類した。これにより、CT検診で発見されたすりガラス陰影の治療方針を構築することが可能となった。

本態解明に基づくがんの診断・治療法の基礎技術の開発研究

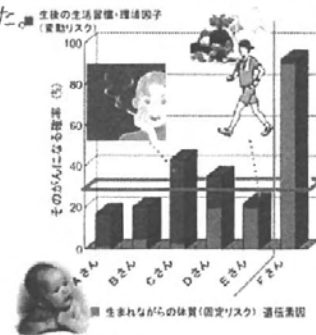
【ミッション】

臨床医学と基礎研究を直接結びつける橋渡し研究の推進を行う。

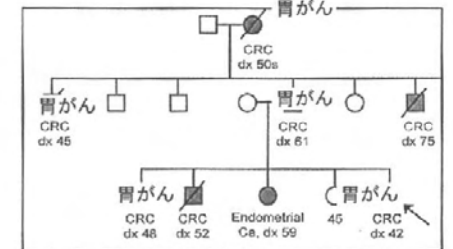
【業務の実績】

○新しいゲノム解析技術による家族性・若年性胃がんの原因遺伝子の探索

遺伝性腫瘍、あるいは若年性・家族性・多発重複がん症例など、強い遺伝素因の関与が疑われる症例に対して、中央病院総合内科遺伝相談外来と連携して、研究所コア・ファシリティーにおいて臨床ゲノム・遺伝子検査を提供して遺伝子型-表現型関連に関する知見を集積し、予防医療の基盤となる情報の構築を継続した。また、大学との共同研究により、家族性胃がんの生殖細胞系列の全エクソーム解析を行い、遺伝子の機能等の情報に基づき、原因遺伝子の候補と考えられる遺伝子リストを得た。



新型高速シーケンサーを用いた全遺伝子のDNA塩基配列解析



まず、既知の遺伝性胃がんの遺伝子（CDH1）を調べても、変異が見つからない症例を抽出

計13家系の家族性・若年性胃がんの症例から、予防・検診研究センターで行っているコホートの参加者などの標準的日本人には見られない、希な変異を探した。多数の変異が見つかったが、特に3遺伝子は、がん細胞でも変異を来すことが知られているなど、原因遺伝子として有望である。

## 評価項目3：担当領域の特性を踏まえた戦略的・重点的な研究・開発の推進（4/7）

## 有効ながん検診法の研究開発

## 【ミッション】

有効な検診を高い質で行えるよう、有効性評価及び精度管理に関する研究を推進するとともに、死亡率減少が実現できる検診システムを開発する。

## 【業務の実績】

## ○がん検診の有効性評価の個別研究

- 大腸内視鏡検査による大腸がん検診のランダム化比較試験を推進し、累積リクルート数は6512人となった。
- 胃内視鏡検診の有効性評価のための無作為割付けなしの比較対照試験を推進しリクルートを行い、平成25年9月8日まで1200人を登録した。次年度以降も引き続き、リクルートを行う予定である。
- 症例対照研究を完了し、胃内視鏡検診により胃がん死亡率が30%減少することを確認した。

## 療養生活の質を尊重する医療の提供体制に係る研究開発の推進

## 【ミッション】

- ・外来通院治療などの安全でかつ効率的・効果的な実践と普及のための研究開発を行う。
- ・入院から在宅療養への移行を見据えた緩和ケアの提供体制を開発する。

## 【業務の実績】

## ○入院患者の「せん妄」調査を実施

せん妄になりやすい高齢者の入院が増え、せん妄が原因で認知症や寝たきりになるのを防ぐため、東病院において、入院患者を対象にせん妄の起こしやすさを調べ、せん妄のリスク評価を実施し、ハイリスク患者に対しては予防的対応を含めたせん妄対策をおこなうプログラムを開始した。

## ○通院治療から在宅ケアに至る治療及び支援体制の構築

外来に通院する患者家族に対して、在宅での療養を支援する予防的なコーディネーションプログラムの実施可能性試験に取り組んだ。

## がんの原因・本態解明研究の基盤整備・構築と活用

## 【ミッション】

診療や臨床試験から生み出される診療情報、臨床試料をデータベース及びバイオリソースバンクとして整備し、他施設との共同研究も含め研究に活用する。

## 【業務の実績】

## ○包括的同意のバイオバンク構築を継続・発展

包括的同意体制に基づいて7,485症例の研究採血血液（血漿）及び1,536症例の病理凍結組織（手術検体）を新規にバイオバンクに受け入れ、それぞれ、1,202症例、1,039症例を倫理審査委員会の承認を受けて行われる研究に払い出した。

## ○他のナショナルセンターと連携しNCBN（National Center Bio bank Network）の構築

NCBN（National Center Bio bank Network）中央データベース管理部門の検索可能なカタログデータベースを公開し、産学官の研究者による試料利活用の促進を図った。

## 医薬品及び医療機器の開発の推進【S】(30頁)

## 高度先駆的ながんの診断・治療など臨床開発の推進

## 【ミッション】

基礎的研究成果や最先端技術を応用した新しい医療技術（診断・治療・緩和）の早期臨床開発を行う。

## 【業務の実績】

## ○カプセル型内視鏡による大腸検査

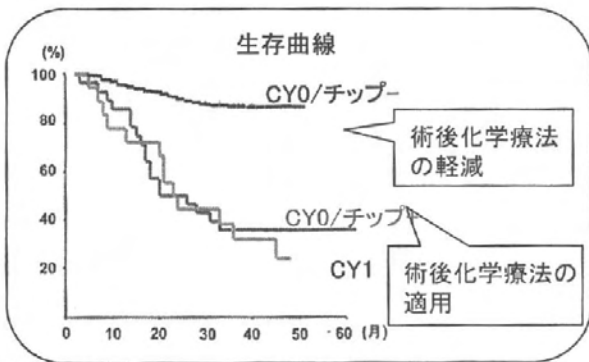
国内で増え続ける大腸癌罹患率の抑制に向け、将来性・患者受容性が期待できる検査法として「大腸カプセル内視鏡」を日本で初めて導入し、多施設共同試験を完遂した。薬事承認され、2014年1月に保険収載された。

〇胃癌進行を的確に診断するDNAチップの開発

胃癌の術後再発を予知する臨床検査用高感度腹腔洗浄液ミニチップを企業と連携で完成し、PMDAへの薬事申請を行った。

このチップで陽性だった例は、細胞診陽性例と同様に外科的切除では80%が再発するため、術前化学療法などの集学的治療が必要である。また、審査腹腔鏡時の洗浄液を調べることによって術前化学療法の効果をモニターすることが可能である。

日本での体外診断薬の開発はきわめて少なく、DNAチップによるマルチマーカーでの診断薬の開発はこれが最初である。



DNAチップ国内初！

薬事申請 (H26)

医薬品医療機器総合機構 (PMDA)

多施設臨床試験開始  
国がん、静がん、愛知がん、慶応

三菱化学メディエンス  
研究用受託解析事業の開始 (H26年～)

国内未承認の医薬品・医療機器治験等臨床研究の推進

【ミッション】

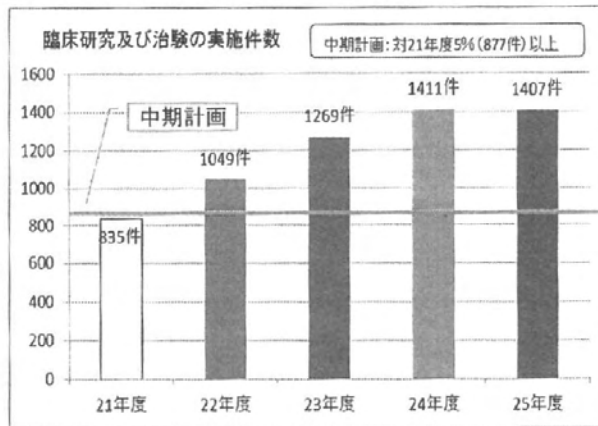
中期目標の期間中に、臨床研究実施件数及び治験の実施件数の合計数の5%以上の増加を目指す。

【業務の実績】

(臨床研究及び治験の実施件数)  
H25年度：1,407件

(目標値)  
中期計画  
：対H21年度5%以上の増加 (877件)

目標達成



がん医療の質的向上・均てん化のための研究開発の推進【S】(32頁)

人材育成に関する研究の推進

【ミッション】

がん医療の均てん化の推進に資するよう、がん医療に従事する者を育成するための研修プログラムや、各地域で指導的な役割を担う者を育成していくための研修の方法について検討する。

【業務の実績】

〇がん専門医を対象とした新規の研修プログラムを開発

全国で進められている「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」において、がん専門医を対象とした新規の研修プログラムを開発するとともに、これまでに開発してきた研修効果を測定する評価方法を活用し、新規研修プログラムの有用性についての検証を進めた。

〇がん相談支援センターの相談員研修会の実施

がん相談支援センターの相談員研修会を各地域で継続的に実施するための検討素材として、相談事例DVDを含む研修パッケージの作成を行った。

情報発信手段の開発(33頁)

患者・国民等へのがん医療・がん研究に対する理解を支援する方法の開発

【ミッション】

患者・家族・国民等に対して、がんの予防、早期発見、診断、治療、がん研究に関する知識や情報を集積してわかりやすく提供することに関する研究に取り組む。

【業務の実績】

〇希少がんの情報提供

希少がんに関する情報提供方法について、がん登録部門とともに、情報と提供方法についてワークショップを開催し検討を開始した。

また、院内がん登録のデータから診療実績病院検索システムを開発し、相談支援センターで希少がん患者の受信先案内を可能とした。



# 評価項目3：担当領域の特性を踏まえた戦略的・重点的な研究・開発の推進（6/7）

## ○「がんのひみつ」の作成・配布

小学生向け学習漫画として学研「がんのひみつ」を作成し、全国すべての国公私立小学校（養母学校、聾学校を含む）23,500校、公立図書館3,000館に寄贈した。

また、電子書籍化により、スマートフォン等から無料閲覧を可能とした。



## がん予防及びがん検診の普及等に関する研究の推進

### 【ミッション】

科学的根拠に基づいたがん予防の推進に資する研究を行うとともに、がん検診の普及の方法について検討、評価を行う。

### 【業務の実績】

- がん検診受診率向上に関して、普及のための以下の研究を行った。
  - 個別勧奨・再勧奨のためのリーフレット「5がん」「乳がん」「大腸がん」「子宮頸がん」を作成した。
  - 都道府県担当者向けワークショップ・市町村研修会を7回開催した。
  - 自治体担当者向けに受診勧奨資材や情報提供を行う研究班ホームページを開設した。
  - モデル都道府県・市町村を設定し、受診率向上のための介入を行った。
  - 年度末の検診期間終了をもって、モデル都道府県・市町村における受診率向上効果の評価を行った。

## 科学的根拠に基づく政策提言の実施に資する研究の推進

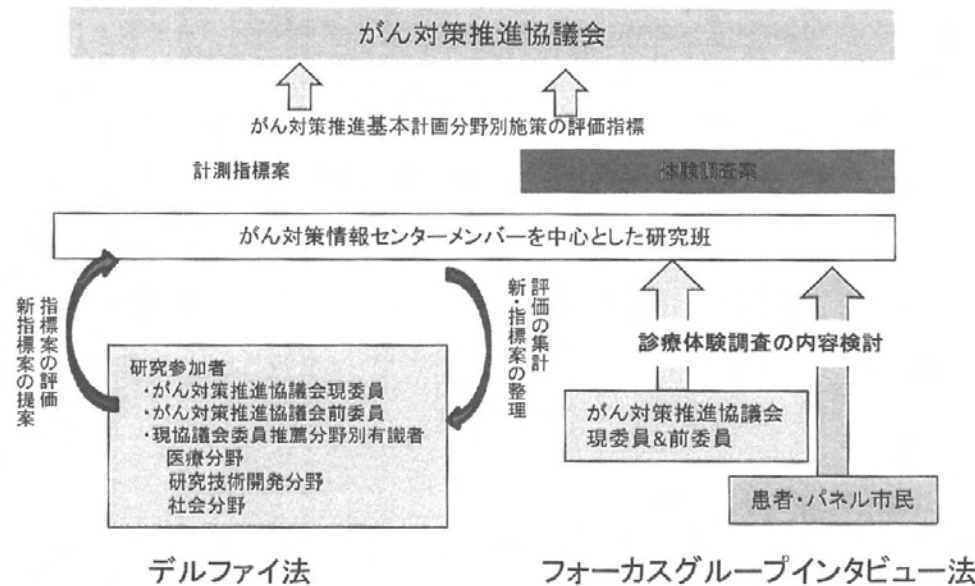
### 【ミッション】

科学的根拠に基づく政策提言の在り方、手法について検討する。

### 【業務の実績】

## ○がん対策の進捗管理指標の策定

がん対策の進捗管理指標を策定するために、分野別施策については、74名の研究協力者を得て3回デルファイ法による検討と最終検討会を行い、91指標（44構造指標を含む）を策定した。また、全体目標については7つのフォーカスグループインタビューとアンケートによる検討を行い、19指標案を策定した。



## ○たばこ政策への政策提言

たばこ政策への政策提言のための科学的根拠を収集し、統合化と可視化を行うためのレポジトリのプロトタイプを作成し、たばこに関する3万件の統計データを収載し、分析した。

## ○がん診療連携拠点病院制度の検討

がん診療連携拠点病院に関する基礎的データを整理し、厚生労働省に提供し、新たながん診療連携拠点病院制度について検討していく際に活用された。

研究成果全般に関する指標【S】

○論文数、被引用数（特に英文論文）

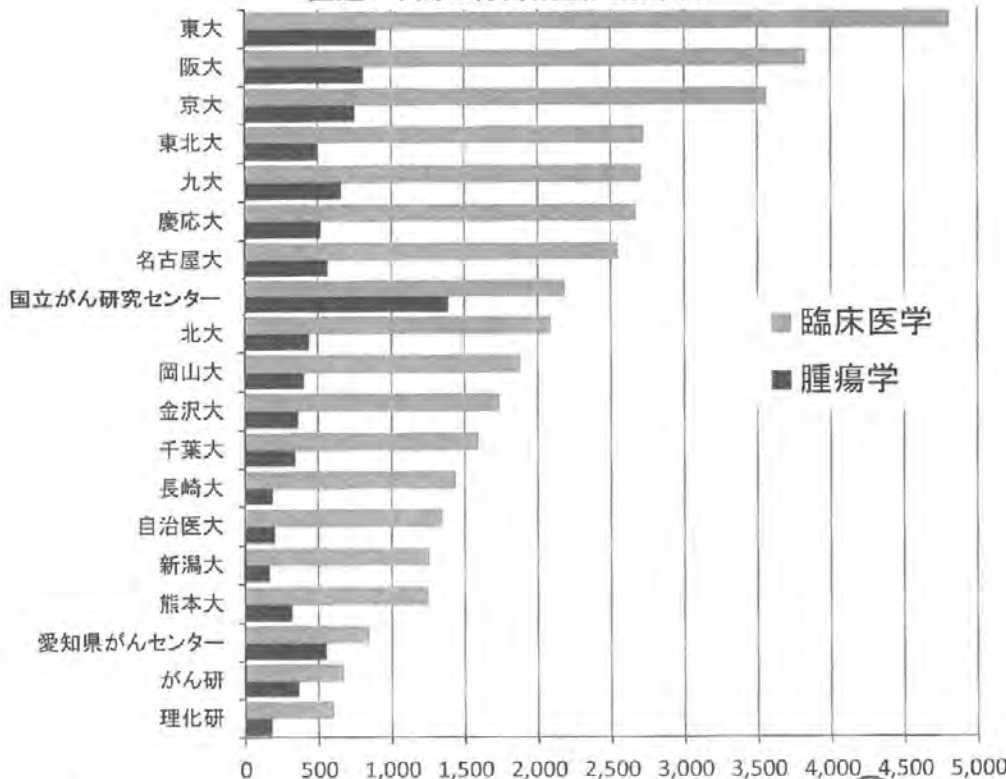
研究成果については、関連学会において発表を行うと共に、論文として積極的に公表。平成25年に発行された国立がん研究センターの研究者が著者又は共著者である英文論文総数は、Web of Scienceによる検索ベースで642件（平成24年は601件）であり、これらの被引用総数は平成26年7月31日時点で1,683件（引用率2.62）。また、642件のうち、掲載された雑誌のインパクトファクターが15以上の論文数は18件。

○日本国内の主な医学系研究機関との比較（Web of Scienceによる集計）

<論文数>（直近5年間の累計）

臨床医学(Clinical Medicine)分野※全体で見ても、論文数は主要大学に次ぐ。腫瘍学(oncology)では、最多。

直近5年間の分野別論文数累計

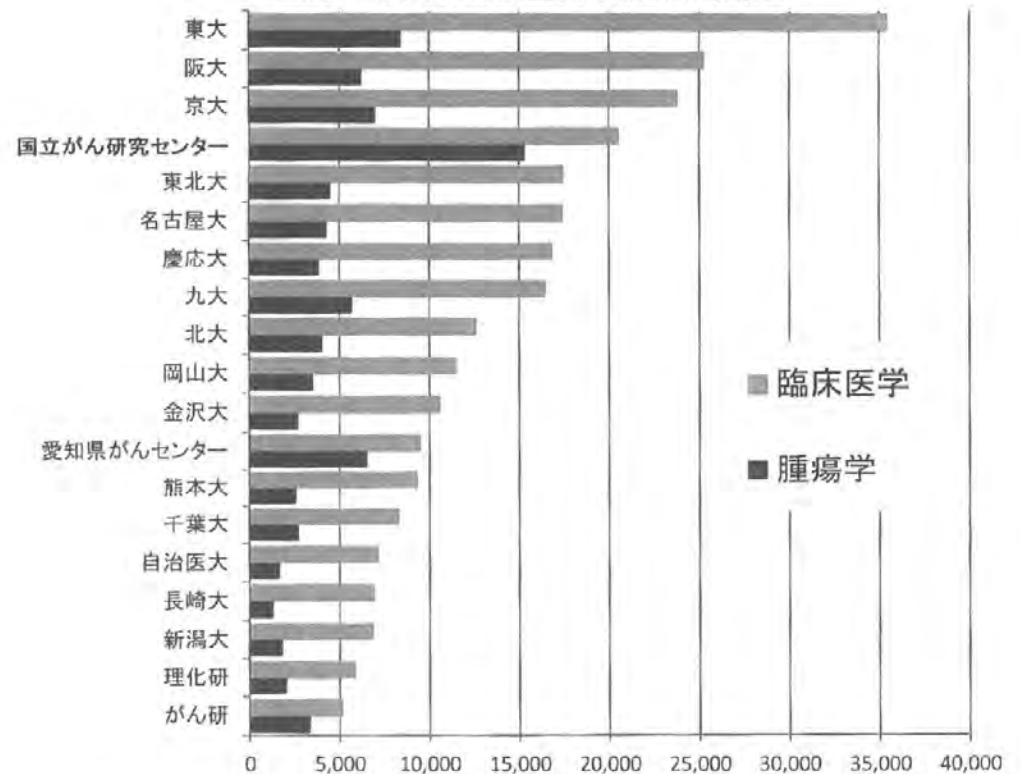


<被引用数>（直近5年間の累計）

臨床医学(Clinical Medicine)分野※全体で見ても、被引用数は東京大学、大阪大学及び京都大学に次いで4番目。腫瘍学(oncology)では、最多。

被引用数※※：それぞれの論文が科学的にどれだけインパクトを与えているかの指標。

直近5年間の分野別論文の被引用数累計



※ Web of Scienceに掲載されている論文は、臨床医学(Clinical Medicine)など22の主要分野に分類されると共に、腫瘍学(oncology)等の詳細なタグ付けが行われている。  
 ※※ 被引用数は、公開した論文が Web of Knowledge 製品データベースの他の論文で引用されている回数  
 ※※※ 有力医学部を有する大学、がんセンター及び主ながん研究機関について集計。

出典：トムソン・ロイター「InCites Global Comparison」を元に国立がん研究センターにおいて集計